

調査区4では、紙櫓西面石垣の基底部を確認しました(写真8)。地山を掘り込み根石を据え(掘込地業といいます)、根石の手前には栗石を敷き詰めていました。同様の石垣基底部構造が、色付櫓の北面石垣でも確認されています。



写真8 調査区4石垣基底部の状況(北から)
根石は地山(岩)を掘り込んで据えられ、手前には河原石が敷き詰められている。青線が江戸時代の地表面の高さ。

鉄砲櫓の説明板を設置しました。

鉄砲櫓は表中門に西に続く平櫓で、二の丸の南面に位置します。東西の長さは33間あり、城内で最も桁行の長い櫓です。櫓内には、城に備え付けの鉄砲のほか、大筒や玉などが収められていました。

説明板は櫓の中央近くに設置しています。歩いたり、距離を測ったりして、櫓の長さを体感してみてください。



写真9 CGで復元した鉄砲櫓(南から)
矢印が鉄砲櫓。後ろには備中櫓が見える。



写真10 鉄砲櫓説明板設置後(北東から)
黄色線が鉄砲櫓の桁行の長さ、赤丸が説明板設置箇所。

厩堀法面の災害復旧について。

2018年7月西日本豪雨により、城の北西部にある厩堀の東側から南側法面が幅約45m、高さ約12mにわたって崩落しました(写真11)。

この法面は、津山城が、^{ほんな}元和元年(1615)に公布された武家諸法度により築城できなくなったため、三の丸の工事を中止した証左である重要な遺構のひとつです。このため、地質や雨水の流れ等の調査を行い、法面崩落の原因を特定し、再発防止対策をしたうえで崩落前の姿に戻します。

今年度は、崩落後の法面の3次元測量、厩堀東側の二の丸石垣根石の位置の確認のための発掘調査を実施し、崩落前後の測量図を比較して崩落の規模を明らかにして、復旧方針を検討しました。

今後は、地質調査等を実施して崩落原因を特定し、具体的な復旧の工法の検討を行います。



写真11 厩堀法面崩落後の厩堀航空写真(左が北)



写真12 平成31年1月に撮影した厩堀法面(北西から)

裏下門東側石垣の積み直しは平成31年度に実施予定です。工事中は、城の北側が通行止めになることがありますが、悪しからずご了承くださいませよう、お願いいたします。

津山城だより No.23 2019年3月	
発行年月日	平成31年3月31日
編集・発行	津山市教育委員会文化課 〒708-0824 岡山県津山市沼600-1 TEL (0868) 24-8413
印刷	(有) 弘文社

津山城だより

TSUYAMAJODAYORI

No.23
2019年3月

津山市教育委員会
文化課



写真1 整備工事が完了した裏中門枅形(中央下は岩盤がみえるようにするため舗装をしていません)

裏中門周辺の整備工事を行いました。

史跡津山城跡保存整備事業では、^{からめて}搦手の^{こぐち}虎口通路の整備を中心に行っています。
平成30年度の整備工事は、^{うらなかもん}裏中門の^{ますがた}枅形虎口部分の土系舗装や、門の礎石の遺構表示、遺構を活かした排水施設の整備などを実施しました。
また、虎口通路に面したところに位置する^{うらしたもん}裏下門の東側石垣がはらみだしているため、石垣の解体を行いました。

また、裏下門の解体に伴い、石垣内部と基礎の状況を確認するため発掘調査を行いました。
調査の結果、石垣の根石の状況や、部分的に修理をおこなったと推測される痕跡が発見されました。
今回は、これらの事業概要を中心に紹介します。



図1 発掘調査位置と整備位置

岩盤があらわに！

裏中門は、津山城の搦手にある門で、二の丸から本丸に至る通路の最初に位置しています。この門は、三方を石垣に囲まれた枡形虎口を形成しており、この門をくぐると裏鉄門につながる雁木へと続きます。裏中門は櫓門で、一階が門、二階が櫓の構造となっていました。発掘調査により門の礎石配置が明らかになっています。今年度の整備では、まず門の礎石をそのまま遺構表示し、周りを土系舗装としました。礎石は部分的に新しい石を置くことで、礎石配置がわかるように表示しました。

また、津山城の排水溝として使用されていた豊島石のU字溝の遺構を、欠落している部分などを補って排水施設として活用しました。溝については、本来は開渠であったと考えられる箇所もありますが、木蓋を設けて通行が可能になるようにしました。

さらに、門の南側の空間については、発掘調査によって岩盤が検出されています。これは、もともとの山の岩盤を削り出すことによって造り出された空間であることがわかる重要な証であるため、あえて土系舗装をおこなわずに、露出させました(写真1)。

写真2 裏中門の礎石(上が北)
南東隅の四角い2石が新しく置いた石です。

裏下門の石垣を解体しました。

裏下門は、裏中門から二の丸を経て三の丸に至る通路の上に位置する門です。門の構造は櫓門で、礎石が現在も良好な状態で残っています。

門の東側に、高さ4m、長さ17mの石垣がありますが、石垣の中央部が大きくはらんでおり、来城者の通行する箇所位置していることから、整備事業で解体修理をおこなうこととしました。解体時に発掘調査を行っています(次項参照)。

石垣ははらみだしていない健全な状態に復旧するため、解体は、積石に番号をつけ、それぞれの石の大きさや割れ、欠けの有無、隣接する石とのかみ合わせなどチェックし、一つ一つの積石についてカルテを作成しながら行うため、非常に手間のかかる作業です。

解体された積石は、同様に取り除かれた石垣の裏込め材として使われた河原石と合わせ、二の丸に置かれました。これらの石はほとんどが積み直しに再利用されることになります。

写真3 解体前の裏下門東側石垣(北西から)
修理では黄色の線より上の範囲を解体しました。写真4 解体前の裏下門東側石垣の航空写真(右が北)
矢印の先にあるのが礎石。赤丸部分が石列。写真5 解体後の裏下門東側石垣のオルソ写真(右が北)
赤丸が石列。解体前の石列の真下に位置します。南東隅(青丸)と北東隅(黄丸)とは、石垣の基礎が異なることがわかります。

裏下門周辺の発掘調査を実施しました。

今後の整備工事に先立ち、江戸期の地面の高さや遺構の有無の確認を目的として通路の周辺部分の発掘調査を行いました。また、裏下門東側石垣の解体工事に伴い、石垣の構造を確認するための発掘調査も行いました。調査区は裏中門から裏下門にかけて6か所を設定しました。調査区1、2(裏下門東側石垣及び裏下門南雁木)

裏下門は、階下が城門で階上に櫓が載る櫓門です。絵図から櫓の東側が石垣に載り、西側が紙櫓に接続していたこと、東側石垣の南側には雁木(石の階段)があり、その上に土塀があったことがわかります(図2、3)。



図2 絵図に描かれた裏下門と土塀(青丸部分)



図3 絵図に描かれた雁木の表記(青丸部分)

調査区1では、石垣解体前に天端面の構造を確認し、解体後には北東隅で石垣基部の構造を確認しました。天端面の中央では、上面が平らな大きな石が3石見つかりました(写真4の矢印)。これらの石は櫓建物の礎石と推測されます。また、東側石垣の内部は全て裏込めの栗石が充填されていました。礎石の北側では、裏込めの栗石の中に東西方向の石列(写真4の赤丸)を確認しました。調査区2の北側では、東側石垣南東隅の石垣基部を確認しました(写真5の青丸)。盛土の上に小さな石を敷き、さらにその上に石垣最下段の石(根石といいます)が置かれています。

石垣解体後の調査区1の北側では、東側石垣北東隅の石垣基部を確認しました(写真5の黄丸)。北端から3石目までは盛土の上に河原石を敷き、その上に根石を据えています。4石目は南東隅の基部と同じ構造です。4石目の石垣内側には石列がありました(写真5

の赤丸)。この石列は、天端面調査時にみつかった石列の真下に当たる位置にあることから、石垣内部の栗石が動かないように固定するためのものであると考えられます。石垣基部の状況をふまえると、石列は江戸期の石垣の部分解体修理の痕跡で、石垣の北端から3石目までが修理範囲であったことがわかりました。

調査区2では、雁木がみつかりました(写真6)。見つかった状況から、本来はもう少し上まで雁木の段があったことがわかります。昨年度実施した肘櫓の東側の発掘調査でも雁木が確認されており、今回みつかった雁木は昨年度のものと同様ということがわかりました。

写真6 調査区2全景(東から)
矢印が雁木。青丸部分には○の中に「大」の刻印があります。

調査区3～6

調査前から北側に面を持つ石列(写真7の矢印)が一部みえていましたが、これらの石列は、瓦片を多く含む層の上に置かれていることから、廃城後に置かれたものと推測されます。瓦を多く含む層の下で、江戸期の地表面を確認しました。地表面は北側に向かって緩やかに下がっていることがわかりました。



写真7 調査区4全景(西から)